

土曜の昼前、通勤ラッシュはとっくに過ぎた頃だろうに、
相変わらず駅は人が混みあっていた。

出席日数やら内申やらが足りないと抜かされたから登校してみたが、こうも人混みの中を歩かされると気も滅入るものだ。もう帰ってやろうかな、なんて想いが舌打ちとして表に出た。

すれ違ったOLがビクッと肩を跳ねさせ、小走りで出口のほうに向かっていく。

「気分ワリィ〜……」

ポケットに手を突っ込んで、定期を忘れてきたことに気づいた。まあいいや、と背の高いサラリーマンの背中に張り付く。こういうときは人混みでよかったと思うわけだ。

改札を抜けるオッサンサラリーマンにしれっとぴったりくっついて、改札に弾かれる前に入ってしまう。

「チッ、このガキがよ……」

「アアッ!？」

舌打ちを向けられた気がして咄嗟に振り向くが、近い距離には誰もいなかった。まるで俺が突然奇声をあげたとでも言いたげに、周りを歩く人間たちと距離ができていく。

「クソ、舐めやがって」

むしゃくしゃして地面を鳴らす。スニーカーがダンツと床を叩く音で幾分かすっきりした。苛立ちがどうでもよくなっていく。

帰りも無賃乗車にちょうどいい人がいるといい。そんなことを考えながら、俺はホームへ降りた。

ホームもやけに混み合っている。空いているところ、もしくは割り込みやすそうなところを探して歩いていたら、駅員に声をかけられた。

「一番奥の車両空いているので、そちらに」

「奥う？ まあいいや、アザース」

駅員が軽く頭を下げる。なんで俺に空いている場所を教えたのかは分からないがラッキーだ。ここから遠いが、それでも空いているに超したことはない。

ふと、まさか俺に嫌がらせで奥に行かせようとしてんのか？ と思い至る。そうだとしたらぶん殴ってやりたいが、もう駅員のところまで戻るのも面倒だった。仕方なしに、そのままホームの一番端を目指す。

駅員に言われた通り、一番奥の待機列に並ぶ乗客は、不自

然なほど少なかった。俺のほかに臭そうなガリガリのオッサンが一人。穴場ってやつなのかも。

ちょうど立ち止まったところで、電車がホームに入ってくる。ワンチャン座れたりしないかと思ったが、車内は想像より人が混み合っていた。

「いや満員じゃねえーか……」

チラと隣の車両を見てもみるが、そちらもやはり満員そうさ。なんなら女子高生が押し出されそうになっている隣の車両よりは、半人分のスペースがある目の前の車両のほうが幾分かマシそうである。

仕方なしに、ちっちゃなスペースに体をねじ込んだ。

「……？」

車内の奥から体を押されるかと思ったが、意外とすんなり入れてしまった。またもラッキーである。車両の奥は見た目より空いていたらしい。

しかし登校ってやつはここからが長い。

閉まり行く扉の窓に、怠そうな俺の顔が薄く映った。

(漫画読も)

スラックスに手を突っ込んでスマホを取り出す。そろそろ今日の無料チケットが解放されているはずだ。

(一気に百枚くれえ配って欲しいよな～)

お気に入り登録していた読みかけの漫画を開く。『無料チケットで続きを読む』のボタンをタップしたところで、ぞわり、と嫌な感覚が背後を覆った。

「ッ!？」

硬い手が、俺の尻を撫でている。

(痴漢……!? 男だぞ……!)

首だけで振り返ろうとするが、いつの間にか人が迫ってきていてうまく背後を確認できない。そうこうしている間に、手のひらがさわさわと尻を撫で回し始める。

(キシヨキシヨキシヨキシヨキシヨ!!)

ぞぞぞぞッと鳥肌が立っていく。

逃げようとしてもすぐ目の前に扉があってロクに距離が取

れない。それどころか痴漢も着いてきたようで、ぐっと背中を押される。扉の窓も自分の顔がうっすら映るだけで、その背後まではわからない。

尻に張り付いた手は、尻たぶの間に指を這わせ、すりっすりって上下に動かし始めた。たまに股ぐらまで伸びてきて、咄嗟に足を閉じればその手を挟むことになる。

そうすると股の下でぐにぐにと気持ち悪く手を揺らされた。

(き、きもちわりい～～っ!!)

悪寒のあまり声が出そうになる。

漫画を読む気分でもなくなって、ぎゅっとスマホを握りしめた。

降りたらずえたい殺す。ぶち殺す。家まで行って全員殺してやる。

ストラックスがぐい、と引っ張られた。かと思えば、背中に手をぴったりと添えられる。まさかと思う間もなく、ストラックスの中に手が入ってきて、尻たぶをもみっと掴まれた。

「ヒッ」

ベルトを緩くしか閉めていなかったことを心の底から後悔した。鳥肌が止まらない。尻たぶで指を挟まされている。身

じろげば、その指をきゅっと強く挟んでしまった。

どうしたらいいのかわからない。血の気が引いて具合が悪くなっていくのを感じながら、外の景色を見た。

よりによって、駅と駅の区間が長いタイミングで。

(絶対殺してやる……)

どうにか殺気だけでも伝わりやがれと、窓に映る自分を強く睨み付けた。

あれからもう二、三分は経っているはずなのに、未だ気色悪い手が離れていく様子はない。ジッと尻たぶの合間に指を挟んだまま、たまに関節がすりすり撫でてくる。その感触の気持ち悪さに、指を動かされるたびに総毛立った。

なんだか具合が悪い気がする。

(次の駅に止まったら絶対に車両を変えてやる)

しばらく大人しかった指が、またもぞもぞと動き始めた。今度は下の方にずんずん進んでくる。

「!!」

そのまま指は、僅かに開いた股ぐらに入り込んできた。

——マズい。非常にマズい。

なにがって、俺は男であるが、男性器を持たないのだ。生まれつきそういう体をしていて、代わりに女性器がついている。骨格も声も顔も嗜好も男そのものだから、普通に過ごしていて性別を間違われることはない。

ただし、この秘密を知られてしまっただけは話が別だ。

(くそ……っ！ やめろ……！)

指がナニかを探して動き回っている。恥肉の間に入り込んできたかと思うと、まんこの入り口に指を引っかけられた。濡れた場所がクチッと水音を鳴らす。

ガタガタとうるさいはずの車内で、なぜかその音だけはよく響いた気がした。

ぐぷ♡

穴に気づいた指が、ナカに入ってくる。

「〜〜〜〜ッ！」

ちゅこ……ちゅこ……と静かに抽挿され始めた。

得体のしれない人間の指が俺の中に……？

こみ上げる不快感に足が震える。ようやく引き抜かれたはずの指は、今度は腰周りをぐるっと回って、前からクリトリスをきゅむりと摘まんだ。

「〜〜〜〜い ㇿッ!!♡」

背中に誰かがぴっとりとくっついている。

周りもそろそろ誰か気付けよ！ 俺は知らない誰かに後ろから抱かれているんだぞ、どう考えてもおかしいだろ！

片手が恥肉を広げて、もう片手の指がクリトリスに当てられている。逃げようと腰を動かしても当たり前に誰かの指と体は着いてきた。どうにもならないまま、クリトリスに添わされた指がゆっくりと上下に動き始める。

「ㇿっ……♡ ツ♡♡ ふ、くう……ッ♡」

すりっ♡すりっ♡

根元から先端にかけて優しく撫でられる。ぞわぞわと全身を覆っていた悪寒は、いつの間にか悪寒ではないなにかに変わっていた。

気持ちいいはずがない。こんな、知らない誰かにクリトリスを撫でられたって、気持ち悪いだけのはずなのに。

「ぐうん……………ッ♡」

とぷり♡

愛液が零れた。クリトリスを撫でていた指が愛液を掬いに行き、またクリトリスに戻ってくる。今度はきゅむっとつままれた。電車の揺れに合わせて指がちゅるんっ♡と滑って、甘い電流のような快感が発生する。

「うッ、ふうん、ンゾ……………♡♡」

声を我慢しなきゃ周りの奴らにもバレちまう。可哀想な目で見られでもしたらたまったもんじゃない。

なのに、硬い指の腹がカリカリとクリトリスを弾き始めた。

「っ♡ あ♡ ～～ッ♡ う、ンッ♡ くうう……………っ♡」

全身が熱くなっていく。腰をカクカク捻っても逃がしてもらえない。たまに強く挟られるように指を滑らされるのが気持ちいい。溜まった快樂がぱちぱち弾けて、わけがわからなくなっていく。

「グッ♡ は、っ♡ あ♡ んっ♡ んうッ♡」

かりかりっ♡かりかりッ♡

「くそ……っ、んうッ♡ ふ、やッ♡ んううッ♡」
くちくちくちくちくち♡
「ん、ん♡ ん♡ んう♡ ん♡ んッ♡」

鼻にかかった声を我慢できない。

いつの間にか俺は、ピンと硬くなったクリトリスが嬲られるのを喜んで、足に力が入れて背伸びしていた。ぐうっとクリトリスに力を込めて、俺のほうから快楽を拾いに行ってしまう！

「お♡ くるっ♡ ～～～っ!!♡♡」

ガクンッ！と体が大きく跳ねた。イッチまった。イカされた。見たこともない痴漢野郎に！

下着もびしょびしょに濡れそぼって気持ち悪い。

（ありえねえ！ イカされた……！）

もう我慢できない。バレてもいいから犯人をぶち殺してやる。肩で息をしながら、振り返った、その瞬間。

ストン。

「……………は？」

濡れたまんこがすうすう涼しくなった。恐る恐る下を見やれば、スラックスを引きずり下ろされて、下半身が丸出しになっている。

「あ、……………ええ？」

どうということだ。咄嗟に周りを見る。周りもみんな、俺を見ている。俺が下半身丸出しになっているのにも気づいている。

とりあえず、か、隠さなきゃ。

慌ててしゃがんだ俺だったが、シャツの襟をぐいっと掴まれた。

「ぐえっ」

後ろに回り込んだ誰かが、俺の顎を掴む。乗客全員に俺の顔を見せるように左右に動かされた。突き刺さる視線に、じわじわと顔が熱くなっていく。なにが起きているのだ。分からないまま、片足を持ちあげられた。

イッたばかりの濡れたまんこがおっぴろげになる。勃起したままのクリトリスがまだムズムズしていた。

ヴヴウ……。

隣から聞こえる機械音。ピンク色の電マが、俺に断りもなくクリトリスに当てられた。

「ふううううづッ!?!?♡」

ばちっ♡ばちばちッ♡♡

強すぎる快樂に目の前がまたチカチカする。

骨から深く震わせられて、クリトリスはあっという間に果
てていた。

「おおッ!♡ おッ♡ ンだよコレっ!!♡ お、おおおおッ
♡ ほっ♡ おッ♡ はなせっ、はなせっ♡ や、おおおお
おおッ♡♡」

ヴヴヴヴ♡ヴヴヴヴヴヴヴ♡

電マが恥肉ごと丹念に刺激してくる。身を振ってもどうにも
ならない。愛液が車内にびちゃびちゃと飛び散って、近く
に立っていたサラリーマンに飛びかかる。しかしソイツは汚
れたことを気にするわけでもなく、静かに俺を見ていた。

「見んなッ！ ～～ア、っ見ん、な、ア♡ やめろっ♡ も、
イッたって、……おおおおッ♡ おッ♡ おおッ♡ ほ♡

はなせっ♡」

ヴヴヴヴヴ♡ヴヴヴ♡ヴヴヴ♡

「もうやだっ♡ やだ♡ 電マやめろお♡ ア♡ おお♡
イぐっイぐっいぐいぐいぐいぐいぐッ!!♡♡」

頭が真っ白になって。

ぷしゅーーーーッ♡♡

勢いよく透明な液を吹き出していた。電マが潮を弾いてまた車内に飛び散る。

潮吹きまでさせられて、ようやく電マが離れて足も下ろされた。まだクリトリスがじくじく♡と疼いている。

「はあッ、はアッ♡ くそッ♡ オイ誰か見てねェでなんとか言えよ！ 変態共がよ！」

俺が怒鳴れば、乗客たちは互いに顔を見合わせ、不思議そうに首を傾げた。

「聞いてんのかって!! アアッ!? ……………あ？」

そして気づいてしまった。

どいつもこいつも勃起している。勃起チンポをビンビンにして俺に向けていて、どいつもこいつもニヤニヤと下品な顔

で俺を見ていた。

「お、お前ら、全員、グルなのか……？」

「おっやっと気づいたんだねえ」

俺の体を支えていたヤツが楽しげに言った。

それから、乗客たちが次々に俺に話しかけてくる。

「急に『なんとか言え』とか言うから、まだ気づいてないの
かってびっくりしたよ」

「普通の車両でこんなこと許される筈ないだろ～？」

「……は？ はああ？ なに、が、ガチでグルなのかよ……」

「君さあ、今日乗ってくるときキセルしたよね」

「キ、キセル？」

「無賃乗車だよ無賃乗車」

「今の子はキセルって言わないの？」

「まあいいや。ここはねえ、教育車両なんだよ」

「教育……？」

意味が分からない。たった一回、ちょっとズルしたくらいで、どうしてこんな目に遭わなければならないのだ。そもそも不正乗車だって？ 降りるときに俺が申告して払うかもしれないのに！ コイツらは何を言っているのだ。

思わず絶句する俺を、周りのヤツらがあからさまに嘲笑してくる。

「今日だけじゃないよ」

「先週も無賃乗車したよね」

「その前は歩いているだけのおじいさんに威嚇して、優先席に座りたい妊婦さんを押しのけたこともあったね？」

「は、はあ？ 気のせい……」

「気のせいじゃない!!」

急に耳元で怒鳴られた。心臓がバクバク言う。

「他にもいっぱいあるんだよッ！　ちゃんと全部ビデオに残ってるからねッ!!」

「悪いガキにはおしおきしないと」

「……………っ」

「ブサイクなオスガキで外れかと思ったけど、まさか具合のよさそうなまんこがついてるなんて、ラッキーでしたな」

「キツキツでよかったですよ～。たぶん初物です」

「よく見ればおっぱいもでっかいですし」

「は、はあ!？」

「いやあ、いいメスの日にあたりました」

「そうですね、じゃあ、みんなでもっとメスにしましょうね」